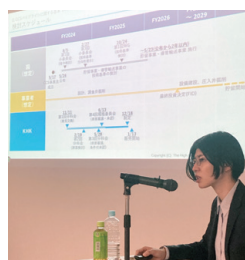


特別民間法人高圧ガス保安協会 総務・企画部門 水素センター さかきばら かなこ 榎原 叶子 氏

2017年度 岐阜大学 工学部化学・生命工学科 卒業
2019年度 岐阜大学 自然科学技術研究科
物質・ものづくり工学専攻修士課程 修了



新エネルギーを社会へ



策定した基準の
認知拡大に向けた講演

私が所属している高圧ガス保安協会は、高圧ガスによる災害防止を目的として、高圧ガスに関する調査・研究・教育・検査などを行う専門機関です。規格・基準といった制度インフラの整備・普及とその国際調和を通じて、安全な社会を支えています。

現在は水素センターに所属し、カーボンニュートラル社会の実現に向けて、水素・アンモニア・CCS（二酸化炭素回収・貯留）など新エネルギー分野の社会実装に携わっています。主な業務は、行政機関、事業者などと国内外で意見交換を行い、多様な知見をつなぐコーディネーターとしての役割です。端的に言えば、技術やルールを社会の中で機能させるための橋渡しを担っています。

世界の動向も踏まえながら、現実的で実効性のある取組の方向性を探り、自社に留まらず業界全体の発展につなげていくことが求められます。技術や制度の最前線に触れ、それを社会に還元していく仕事であり、大きなやりがいを感じています。



海外機関との水素保安に関する国際会議

人をつなぎ、形にする

在学中には、ISO14001（環境マネジメントシステム）の内部環境監査員として活動する中で、関係者との対話を通じて仕組みを改善していく経験を重ね、技術そのものを発展させるだけでなく、技術が適切に機能する環境を整えることの重要性を実感しました。これが現在の「技術の社会実装に携わりたい」という思いにつながっています。

こうした「つなぐ」仕事をする上で意識しているのは、「一人で完璧を目指さないこと」です。最初から100点を目指すとは、時間がかかるだけでなく、自分の視野に閉じたアウトプットになりがちです。そのため、まずは「迅速な60点」を出し、周囲の専門家との議論を通じて多様な視点からのフィードバックを取り入れ、磨き上げていくプロセスを大切にしています。多くの人と協力しながら完成度を高めていく姿勢は、社会に新しい仕組みを根付かせる上でも重要です。



学生時代には内部環境監査員として学長と意見交換

自分だけの強みを育てる

社会は想像以上に広く、多種多様な仕事によって成り立っています。例えば工学部だからといって、ものづくりだけが進路ではありません。自分の関心や強みを分解して考えてみることで、思いもよらなかった選択肢が見えてくることがあります。

学生時代に学んだ知識がそのまま仕事に直結する場面は、正直それほど多くないかもしれません。しかし、研究や課題を通じて身につく「情報を集めて整理する力」や「粘り強く考え続ける姿勢」といった基礎的な力は、社会に出てからも確実に役立ちます。大切なのは、専門知識だけを見るのではなく、自分がどのようなアプローチや考え方を得意としているのかを俯瞰的に理解することです。そうすることで、自分が活躍できる分野が見えやすくなります。

そして重要なのは、「強みを掛け合わせる」という視点です。一つひとつの強みは目立たなくても、異なる強みを掛け合わせることで自分ならではの価値が生まれます。大学時代は、自らの可能性を試すことができる貴重な期間です。早くから一つの道に絞り込みすぎず、さまざまな経験を通じて多くの「強みの芽」を見つけたいと思います。好奇心を大切に、自分の可能性を広げていってください。

▶ 特別民間法人高圧ガス保安協会(KHK)
ウェブサイト
<https://www.khk.or.jp/>



独立行政法人国際協力機構（JICA）九州センター ^{かたみ} 片田 美穂 氏

2020年度 名古屋大学 農学部応用生命科学科 卒業
2022年度 名古屋大学 生命農学研究科応用生命科学専攻
博士前期課程 修了



国際協力の仕事

JICA（国際協力機構）は途上国に必要な支援を行うために、現地の課題調査や関係機関との協議、現場で活動する専門家や開発コンサルタントとの調整など、いわば国際協力の「プロデューサー」的な役割を担っています。私は入構後、森林・生物多様性保全分野を担当していました。森林減少・劣化は気候変動を加速させる大きな要因である一方、森林が豊富な国では、森林資源の利用・輸出により生計を立てる住民や現地企業も多く存在します。相手国の持続可能な林業を実現させるための支援内容を、森林分野の専門家と一緒に検討していました。そこで改めて感じたのは、「国づくりは人づくり」であるということ。例えば、森林資源状況をモニタリングする高度なリモートセンシング技術を導入する際は、それを運用できる行政組織や人材の育成が不可欠です。目に見える成果を出すには時間がかかったとしても、相手国の将来像を見据え地道な協力を積み重ねることの大切さを、日々実感しています。

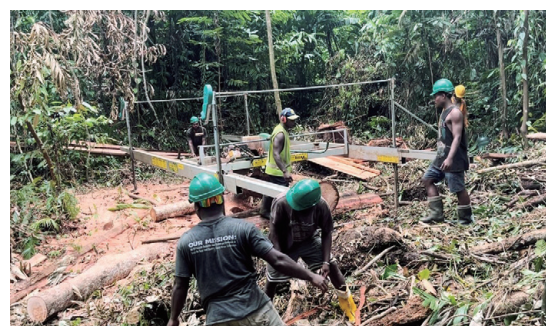


パプアニューギニアの伐採された丸太

地域の力を途上国に、国際協力の経験が地方創生に

現在は九州を拠点に、国内の自治体・大学・市民団体など、地域の方々が国際協力に参加する機会を広げる仕事をしています。私は学生時代、小麦に感染しカビ毒を生産する糸状菌の研究をしていました。研究の面白さを感じながら、日本の技術や研究力が、もっと開発途上国の課題解決に役立つ場面はないか・・・そんな風に考えていた学生時代でしたので、研究者としての視点と、開発途上国の現場を知る立場の両方を活かし、大学や地域の団体が国際協力を行うサポートができたときは、とても嬉しく思います。

また、近年では地方創生事業にも取り組んでいます。国際協力を通して培われた日本の知見やノウハウ、途上国の課題解決経験のある人材は、日本の地域活性化に貢献できる、大きな力があります。日本の各地域を勉強すればするほど国際協力の可能性は広がるばかりです。



ソロモン諸島での丸太製材の様子

みなさんへ

私は高校生の頃から「貧困地域の食糧問題解決に携わりたい」という漠然な想いがあり農学部へ進学しましたが、それまで海外経験が無かった私は、大学の先生や先輩に情報をもらいながら、農業系のボランティアやインターンシップに参加しました。そこで初めて海外の暮らしの面白さや多様な価値観に触れ、はっきりと「国際協力」が卒業後進路の選択肢の一つとなりました。

今振り返ると、大学という場所はその分野を極めたプロフェッショナルに囲まれ、最先端の技術、豊富な知識や人脈に触れることのできる、非常に恵まれた環境でした。皆さんも今の環境や学生という特権を生かしてぜひいろいろなことに挑戦し、自身の視野を広げてほしいです。

▶ JICAウェブサイト
<https://www.jica.go.jp/>



▶ JICA中部ウェブサイト
<https://www.jica.go.jp/domestic/chubu/index.html>



▶ JICA九州ウェブサイト
<https://www.jica.go.jp/domestic/kyushu/index.html>

